学び舎通信

4月号

町内小中学校の情報を
毎月お届けします

3年生を送る会

2月24日に「3年生を送る会」が行われました。実行委員会を組織し、在校生全員で作り上げました。

部活ごとに撮影したビデオ、吹奏楽部の演奏、卒業生の3年間の歩みをまとめたスライド、転勤していった先生方からの手紙やメッセージビデオ等、工夫を凝らした企画に感謝の気持ちを込めました。

3年生は、お礼として卒業式で歌う合唱を披露しました。3年生全員での合唱は迫力があり、あらためて3年生のすごさを感じることができました。

写真は、エール交換の様子です。在校生から卒業生へ、卒業生から在校生へ、思いを込めてエールを送り合いました。仙南の雄大中の伝統を確かに引き継いだ瞬間だったと思います。

第70回卒業式 ～感動を胸に未来を切り拓こう～

3月10日、大勢のご来賓の皆さまや保護者に見守られ、第70回卒業式を行いました。

新体育館で行う初めての卒業式、厳粛な空気に包まれ、卒業生一人一人が、品川信一校長から卒業証書を受け取りました。送辞、答辞、卒業合唱と式が進むにつれ、会場感動が最高潮となり、会場は喝采の渦に包まれました。

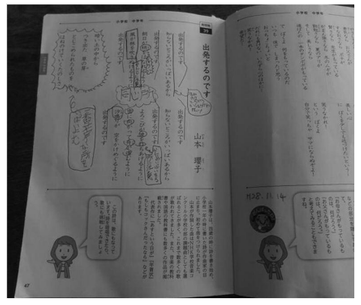
金中を巣立っていく31名が、この日の感動を胸に、それぞれの個性を生かしながら、未来を切り拓いていくことを心から願っています。頑張れ！金中生！

暗唱大好き シリーズ⑫ 金小編

暗唱読本「寿限無」一年間の取り組み

先日、校長先生から暗唱読本を使って、暗唱を頑張っている4年生に「がんばり賞」が贈られました。（左の写真）

金ケ瀬小学校では、朝の時間や業間休み、帰りの会などを暗唱読本を使って暗唱活動に取り組んできました。暗唱読本は低学年（25編）・中学年（20編）・高学年（15編）・小学校英語（6編）が収められています。この1年間を通してどの学年も与えられた暗唱をほとんどクリアーすることができました。



今年から使用している暗唱読本ですが、すでにぼろぼろになるほど練習し、使っている児童もなかにはいます。

また、右の写真のように暗唱するためにどんな調子で読んだらよいか、気をつけたいことなどをメモしながら暗唱に取り組んでいる児童もいます。

1年間暗唱活動に取り組んだ児童の感想から「最初は難しかったけれど、一つ一つ暗唱できたことがうれしかった」「友達に負けたくない気持ちで取り組んだ」「次の学年でもしっかり取り組んでいきたい」など意欲的に活動してきたことが伺えます。

人と人とのつながりの大切さ ～東日本大震災追悼式～

3月10日に、本校体育館で東日本大震災追悼式を行いました。

追悼式では、木工作家の遠藤伸一様（石巻市在住）をお招きし、講話をいただきました。震災当時、津波で、家も家族もなくし絶望のなかにいる遠藤様を救ったのは、地域やボランティアの皆さんの励ましと支援でした。「人を救えるのは、人の心だけ。」「人と人とのつながりの大切さを伝えたい。」と述べられ、講話を終えました。遠藤様の話に、そっと涙を拭く児童や保護者、地域のかたがいらっしゃいました。「いかに生きるか」ということを考えさせられたひとときでした。

もうすぐピカピカ1年生の会

2月23日、1年生が金ケ瀬カトリック保育園年長児15名を招待し、「もうすぐピカピカ1年生の会」を行いました。

1年生からは、鍵盤ハーモニカや縄跳び、マット運動など1年間学習したことを発表したり、生活科で作ったおもちゃなどを使って出店をしたり、学校探検をしたりしました。最後に保育園の15人が職員室にきて自分の名前を大きな声で言って「よろしくお願いします」としっかり挨拶していました。入学をとても楽しみにしているようでした。

1年生が、お兄さん、お姉さんとして一生懸命お世話している姿をみて、この1年間大きく成長したことをうれしく思いました。

心のバリアフリーが実現する社会を願って

5年生が「佐藤尋宣さん千嘉さん」との交流会を行いました。

はじめに、盲目のドラマーの尋宣さんの力強いドラムソロの演奏を聴きました。

次に、視覚障害者の日常生活について紙芝居を使って千嘉さんが説明してくれました。

特に印象に残ったのは、尋宣さんの「障害というのは、人がもっているものではなくて、その人たちにとって障害になるものなんだ。」という言葉でした。児童はうなずきながら聞いていました。

最後に、どんなものが障害になるのか探してみること、そして、自分にできること、社会として取り組まなければならないことについて考えてみようと子どもたちに投げかけられました。

身近な自然再発見 …人間と共生する昆虫たち…

36「青い稲妻」

▶アオスジアゲハ

その昔、スキーでかっこよく斜面を滑り降りるトニーザイラーという俳優は「白い稲妻」と呼ばれていました。蝶の世界にも「青い稲妻」と呼びたい蝶がいます。もっとも私が勝手にそう呼んでいただけですが。

町内に居るアオスジアゲハは、名前のとおり黒い羽に青い2本の帯が走るきれいな蝶です。青空を背景に飛ぶ姿は思わず見とれてしまうくらいです。

この蝶は1年に2回、春型と夏型が姿を見せます。5月になると、よく晴れた日に船岡の館山のてっぺんに通ったものです。ここにはアオスジアゲハの幼虫が食べるシロダモという木がたくさん生えています。葉っぱの裏に蛹（さなぎ）で越冬したアオスジアゲハが春に羽化して飛び出すからです。

春のアオスジアゲハは高いところを稲妻のようなスピードで飛びます。長い竿で採ろうとしても空振りばかり。たまにヒメジョオンの花などに舞い降りた時だけがわずかなチャンスでした。「青い稲妻君、今度こそ採ってやるぞ。」と言いながら帰った悔しい思い出だけが浮かんできます。

そんなアオスジアゲハが夏には嘘のように簡単に採集できたのにはびっくりでした。町内に咲くヤブカラシの花の蜜を夢中で吸っているアオスジアゲハが嘘のように網のなかに収まってくれたからです。

この小文も今回が最終回になります。これまで虫たちと人間のかかわりを書いてきました。大自然のなかで小さな虫たちは一生懸命に生きています。私たち人間が学べることもたくさんありましたね。皆さんの虫に向けるまなざしが少しでも前より優しくなったとしたら嬉しい限りです。3年間のご愛読、ありがとうございました。

元金小校長、昆虫教室（町教育委員会主催）講師　鈴木健司さん